

カリビアン・ショック ——唯名論的研究旅行——

足立 信彦

私はカリブ海へ行ったことがある。カリブ海という名前の起源をご存知だろうか。コロンブスの航海日誌に記されたカリベ族は人を喰らうという原住民の噂話、この海域の名前はそこからとられ、cannibal という語もそこからの連想で生じたと言われている。

青い海と輝く太陽を裏切る暗い歴史を背負った「人喰いの海」を私たちが訪れたのは一九九五年冬のことだった。私たちとは木村秀雄(スペイン語)、高橋均(スペイン語)、増田一夫(フランス語)、遠藤泰生(英語)、村田雄二郎(中国語)という面々(敬称略)、そして足立(ドイツ語)である。私以外はすでに皆駒場を去っていった。

当時は語学が違えば前期課程の所属教室が異なりほとんど交流がないのが当たり前だった。そんな私たちが一緒に旅行することになったのにはカリブ海の歴史にも似た暗い背景がある。——一九九三年の言語情報科学専攻新設に始まった大学院重点化の波は容赦なく駒場を襲った。容赦なくというのはつまり誰かがせっせと書類を作り、偉い先生がそれを文部省(当時)に持参してお伺いを立て、しかるのちまた駒場に持ち帰って誰かに書き直しを命ずるという無限ループを指す。誰かに当たるのが我が専攻の場合、駒場に来て間もない上記助教授(当時)六人組(木村さんだけは教授だったかも知れない)である。悪いことばかりではなかった。私たちはここで書類書きの本質を、いやひょっとすると官僚機構の本質を学んだのかもしれない。当時人々はそれをノミナリズム(唯名論)と呼んでいた。調べていただければ分かるのだが、これは誤用であって本来ノミナリズムが意味することとは逆である。すなわち人々は、書類の中でぴったりに帳尻があうところこそがすべてであって事実は度外視、ないし書類に合わせて捻じ曲げる、という書類作成の極意をそう呼んだのである。私はある有力教授の言葉を忘れない。それは、何か新しいことを書類に盛り込む時には「今まではしていなかったけれどこれからはこうしたい、と正直に書いてはいけない。今までも充分していたがこうすればさらに良くなる、と書きなさい」というものだった。このアドバイスはその後何かにつけ役に立った。

ちょうどWindows95が発売されるかされないかという時期である。大学におけるインターネットの使用もまだまだ一般的ではなかった。そんな環境で、語学の授業を終えた私たちは集まっては覚えのない手つきでキーボードを叩きながらせっせと餅の絵を描いていた。意義を感じられない仕事は人を消耗させる。強制労働によって死に追いやられた

カリブ海原住民の運命を知ってか知らでか、ある時誰かがカリブ海へ行こうと言い出した。それぞれの専門にとどまっている限り決して行くことのできない場所カリブ海、しかしこうして言語の壁を越えて知り合った六人が共同で研究プロジェクトを捻り出せば(唯名論) 憧れのカリブ旅行も夢ではないのではなかろうか。

こうして申請した科研『クレオール文化からみた広域移民』が採択された時の喜びは宝くじが当たったかのようなだった。「広域移民」とは私たちの造語だったような気がする。こうしておけば世界中どこへでも行けると考えたのだ。英語を喋る人間は世界中どこにでもいる。フランス語だって負けてはいないし、中国人移民も至るところにいる。ただドイツ人はどうだろうか。もしこの科研がなければ私がカリブ海を訪れることなど金輪際なかっただろう。村田さんが中華料理屋のオーナーから一緒にニューヨークへ行って商売をしないかと誘われたのはスリナムだったかプエルトリコだったか。中国人にとっては世界中のどこもが住処であると同時にどこでも仮住まいなんだと感じた瞬間だった。一方私は一回だけグアダループ島で土産物屋を営んでいるドイツ人移民の女性に出会った。

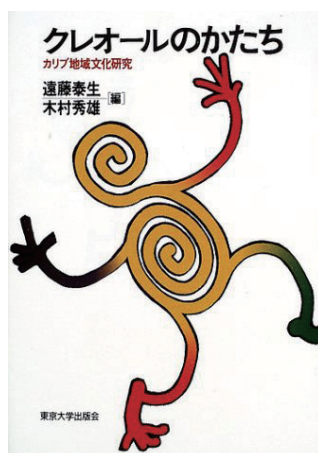
ジャマイカのスラムでは屋根のない家に住む人々を見た。寄生虫病なのか、信じられないほど脚の腫れ上がった男がガイアナの路傍に横たわっているのを見た。フランス領ギアナの街並みがギアナ三国で一番美しいのは独立しなかったおかげなのか。グアダループの浜辺では白人が休暇を楽しみ、黒人がサービスする。史上初の黒人共和国ハイチの人々は今やカリブ最貧国の住民として蔑まれている。恐るべき貧困、人種間格差、植民地主義の爪痕。ドイツ文学に専念していたら決して得られなかったであろう印象と経験を受け止め兼ねて私の頭はくらくらした。それに較べれば文化人類学者である木村さん、旅行の達人高橋さん、le monde francophone を自由に歩き回る増田さん、大中華文化圏を背景にした村田さんたちは余裕綽々のように見えた。

私がその頃おこなっていた研究は「ドイツ文学研究の研究」というやや自家中毒的なものだった。ドイツの文学作品について論文を書きながらもいったい自分がしていることは何なのか分からなくなった私はゲルマニスティク(現在のドイツ語ではドイツ文学研究のこと)の学問史を遡っていった。それはそれで私にとっては意味ある発見もあったのだが、そもそも面白くないし、誰の関心も(ドイツ文学研究者の関心すら)惹かなかった。私は自分の研究に飽き飽きしていた。カリブの太陽はそこに差し込む一筋の光明をもたらしたのである。

短い旅行で得られる経験などたかが知れている。それでもこの旅行は私にとって研究上の転機を意味した。今までの研究を新しい眼で見直し、その意味を考え直し、次の方向性を探るきっかけとなった。

私たちはこの科研の成果を一冊の本にまとめた。うまいタイトルを思いつけずいっそのこと「カリビアン・ショック」(正直な気持ち)にでもするかと言っていた矢先、常に

キャッチーな文句を捻り出してくれる増田さん（その才能は文部省向けの書類作成で遺憾無く発揮された）によって論集は無事『クレオールのかたち』と命名された。地域の紀要がオンライン化されるとのことで余計な費用もかからないだろうからその表紙をカラーで載せておく。私はこのカバージャケットが大変気に入っている。というのも、私がカリブ海で買ってきたTシャツのデザインをスキャンして使ったからだ。幸いとくに抗議も来なかった。



これに味をしめた私たちはその後も何回か共同で科研を申請し、本当ならば行くはずのないところまで旅をした。ブラジル、アルゼンチン、セネガル、マリ、ザンジバル、タンザニア（この時から現研究科長の森山先生も参加）、ルーマニア、ポーランド、私は参加していないがキューバへ行ったこともある。

ひとつの対象を徹底的に追求するという研究人生ではなかったけれど、地域文化研究専攻の同僚のおかげで研究者にあるまじき楽しい大学生活を送ることができた。私は専攻に対して何も貢献しなかったのに、その恩恵はたっぷり受けたと思う。感謝の気持ちしかない。

同僚として過ごしたかつての先生たち、現在の若い先生たち、そして常にわがまを聞いてくれた専攻事務の美川純さん、高橋恵さん、山下啓子さん、木寺ゆかりさん、小幡彩子さん、どうもありがとうございました。